



Title	コリヤードとバ行の濁音前鼻音
Author(s)	山田, 昇平
Citation	語文. 2017, 108, p. 89-104
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/71011">https://hdl.handle.net/11094/71011</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# コリヤードとバ行の濁音前鼻音

山 田 昇 平

## 1. はじめに

中世末の日本語において、濁音は軽微な鼻音を伴っていたとされる。この音（濁音前鼻音）は、いくつかの資料にその痕跡を見出すことができる。その内、J. ロドリゲス『日本大文典』には、次のような直接的な記述がある（翻訳の前半段落は山田昇平（2014）により、後半段落は土井忠生訳による。仮名遣いは現代仮名遣いに改めた）。

- (1) Toda a vogal, antes de, D, Dz, G, sempre se pronuncia como com hum meyo til, ou sonsonete que se forma dentro dos narizes o qual toca algum tanto no til. Vt, Māda, mīdō, mádoi, nādame, nādete, nīdo, mādzu, āgiuai, águru, ágaqu, cága, fanafáda, fágama, &c.

Esta mesma regra goarda algũas vezes, A, vogal antes de, B, mormente quando se duplica, & se muda o, F, em, B, mas isto nam he geral. Vt, Mairi sorofaba.

(177丁裏—178丁表)

【D, D z, Gの前のあらゆる母音は常に半分のテイルを伴っているように、即ち鼻の中で作られる幾分テイルに近いような響きで発音される。（用例は略す）この法則は、ある場合にBの前の母音Aを支配することがある。それは Mairi sorofaba（参りそろはば）のように、主としてFが重複して、そのFがBに変る場合であるが、一般的なものではない。】

この記述から、ロドリゲスが“D, Dz, G”の子音字で表記される日本語のダ・ガ行に濁音前鼻音があらわれるとしていることがわかる。また、後半段落では“B”で表記されるバ行について、一定の条件下であらわれるとしている。一方、“Z”であらわれべきザ行については指摘がない。これを素直に捉えれば、ザ行には存在しないと考えていたことになる。つまり『大文典』では、中世末当時の濁音前鼻音を専らダ・ガ行にあらわれるとしていることになる。また、特定の条件下のバ行にもあらわれ、ザ行にはあらわれないとしていることになる。

このロドリゲスの記述は、日本語史研究において、当該時期の濁音前鼻音を知る

ための比較的信頼性の高い資料として扱われている。

もっとも、これほど直接的ではないにせよ、同時期の濁音前鼻音の存在を示す文献は少なくない。その内の一つに、ドミニコ会宣教師 D. コリヤードの著作がある。コリヤードの主な著作には『さんげろく』・『羅西日辞書』・『日本文典』の三部作、及び自筆『西日辞書』があげられる。これらの著作では、濁音前鼻音が次のようなアセント符号<sup>(1)</sup>“~” (til, tilde) をもって表示されている。

tōga (科) imāda (未だ) qīzzucaī (氣遣い) cotōba (言葉)

この符号について、コリヤードは『日本文典』で次のように述べている。

(2) Luando fuerit hoc signum ~ super aliquā literam ex vocalibus debet proferri sicut, n; sed non in integrum, sed cursim & leniter v. g. vāga.

(p. 4)

【母音字のうち、その上に~の印がある時には、あたかも n のようにひき伸されなくてはならない。ただし、もとのまゝの音で伸すのではなく、速にまたおだやかにひき伸されるのである。例. vāga 大塚高信訳 pp. 2-3】

ここでは“~”の発音法を述べているが、『大文典』のように出現環境に関する記述はない。しかし、この符号は、後続する子音字によって使用の分布が異なることが指摘されている<sup>(2)</sup>。そのため、コリヤードも濁音前鼻音の出現状況に対して、一定の見解を持っていたものと考えられる。裏返せば、“~”の使用傾向から濁音前鼻音に対するコリヤードの具体的な見解を窺うことができよう。

本稿では、このような想定のもと、コリヤードの著作における“~”を考察対象とする。この符号は、次節で確認する通り、特に b の前における使用傾向には問題が残されている。そのため、ここでは『さんげろく』・『日本文典』・『羅西日辞書<sup>(3)</sup>』・自筆『西日辞書』を対象とし、b の前で使用される“~”の使用傾向を整理する。その上で、コリヤードが参照した可能性の高い『大文典』と対照し、両者の影響関係の有無を明らかにする。これにより、コリヤードのバ行の濁音前鼻音に対する理解と、その独自性の有無を確認する。

## 2. 『さんげろく』における“~”の使用状況

まず、コリヤードの著作における“~”の使用状況を概観しておく。ここでは、『さんげろく』の“~”を調査した山田昇平 (2012) から「表 2」を例示する。

表2：後続する濁子音別の“～”

子音字	b		d		g		j		z		zz		合計数
	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無	有	
“～”有	102	1	341	51	252	119	1	0	3	1	39	5	915
“～”無	162	70	75	238	114	334	46	67	273	57	12	5	1453
合計数	264	71	416	289	366	453	47	67	276	58	51	10	2367

「表2」は、濁子音字ごとに“～”の使用数を調査している（ここでは、子音字と“～”が付されうる母音字との間の、スペースや改行といった表記上の区切りの有無も反映させているが、「区切り無し」に限って確認する）。濁子音字ごとに“～”の〔有：無〕を取り出すと、dで〔341：75〕、gで〔252：114〕、zzで〔39：12〕とあって、これらは“～”の付される比率が高い。一方で、bの前で“～”が付される比率は〔102：162〕と、d, g, zzよりも低い。また、zの前では〔3：273〕とほぼ付されない。この傾向は、他の著作でもほぼ同様とされる<sup>(4)</sup>。このような“～”の分布をコリヤードの濁音前鼻音理解に基づくものとするならば、コリヤードはd, zzの綴りを用いるダ行やgを用いるガ行に対して、この音をほぼ認めており、zを用いるザ行にはほぼ認めていないことになる。また、bを用いるバ行には、一部認めているということになる。そのため、濁音前鼻音について、コリヤードとロドリゲスの見解は類似しているということになる。

ただし、バ行についてはなお検討が必要である。ロドリゲスは『大文典』において、バ行の濁音前鼻音について何かしらの出現条件を認めているものの、その記述から読み取れる情報は必ずしも明確ではない。これに対し、コリヤードのbの前における“～”も数値の分布が他の子音と明らかに異なるが、具体的な使用傾向は不明である。つまり、両者がバ行の濁音前鼻音についてどのような見解を持っていたかは、現段階で不明確な部分がある。このうち、コリヤードの見解については、b前の“～”の使用傾向を整理することでより具体的に示すことが可能であろう。

以下では、このような問題意識のもと、『さんげろく』（「さんげ」）・『日本文典』（「文典」）・『羅西日辞書』正編及び補遺・『羅西日』続編<sup>(5)</sup>（前者を「正・補」、後者を「続」、共に述べる場合は「羅西日」）・コリヤード自筆『西日辞書』（「西日」）を対象に、bの前における“～”の使用例を検証する。

### 3. 検証

対象資料における“～”使用例は【一覧】に示し、そこから得られる主な傾向を次の4点にまとめる。

- ① b の前に“～”を付す語は、特定の語に限られる
- ② ①で確認された語は、対象資料の間ではほぼ共通している
- ③ “～”が付される b は、ba の綴りのものに多い
- ④ “～”が付される b は、コリヤードが濁音化と認定した b に多い

以下、①②③④について、それぞれ確認していく

### 3.1 ①について

①について、b の前に“～”を付す語は特定の語に限られるとした。この点を述べる前に、他の濁子音字を含めたコリヤードの“～”の使用について確認しておく。

#### 3.1.1 コリヤードは“～”をどのように使用しているか

山田 (2012) では「さんげ」を対象に“～”の書記方針について考察し、この符号は随意的な判断によって付される、オプショナルな性質のものとする。つまり、この符号は必須のものではなく、付すべき語に付さない場合もある (tōga ⇔ toga)。つまり、“～”の不使用が当時の濁音前鼻音を直接反映しているとは限らない。

もっとも、コリヤードの著作の内には、g や d といった“～”が付されやすい濁子音字を持ち、かつ語としての使用例が多くても、一貫して“～”が付されない語が存在する。これについて、成 (1995) では「羅西日」・「さんげ」で、接続助詞 nagara (ながら) に相当数の使用例 (「さんげ」で延べ51例) があるにも関わらず、“～”が付された例が確認できないことを指摘する。これを受けて、山田 (2015) ではその他にも使用数が多いにも関わらず、一貫して“～”が付されない語があること指摘し、コリヤードが“～”を付すべき語と付さない語の選択意識を有していたとする。

#### 3.1.2 b 前の“～”の有無

以上、他の濁子音字における“～”の使用状況を確認した。成論文・山田論文では b については扱わないが、同様であることが予想される。このような予想のもと、まず、各対象資料のうちで b の綴りを持ち、“～”を付されうる環境にある語で一度でも“～”が付された語 (“～”有) と、一貫して付されない語 (“～”無) の異なり語数を次の表①で示す。

表①	“～”有	“～”無
「さんげ」	10	54
「文典」	12	35
「正・補」	52	271
「続」	47	175
「西日」	29	126

いずれの資料でも b の前で“~”が付されうる語は少数であることが分かる。具体的な“~”の使用例は【一覧】に示した通りであるが、【一覧】で示した以外の語は相当数の使用例があってもこの符号は付されない。例えば助数詞の *tabi* (度) は、“*fito tabi*” (一度) のように用いられ、「さんげ」では延べ33例使用されるが、“~”が付された例は確認されない。一方で、「さんげ」で延べ9例用いられる *cotoba* (言葉) は“*cotōba*”のようにすべて“~”が付される。このような点から、コリヤードは b についても、“~”の使用の有無を語ごとに意識していたといえる。

またこの使用意識は、合成語の場合、b をもつ構成素がどのような項と合成しても、概ね“~”の有無が共通していることから、各構成素を単位としていることがわかる。これは次に示す通り、連濁する場合も同様である。

- (3) a *faiābaiato* (早早と)、*qībaiai* (気早い)、*uocoxī baiai* (起こし早い) → いずれも“~”有  
 b *cauabucuro* (皮袋)、*canebucuro* (金袋) → いずれも“~”無

### 3.2 ②について

先に b の前で“~”が付される語は特定のものに限られるとしたが、語ごとの使用の方針は、コリヤードの著作の中で概ね共通している。

例えば、“*cotōba*” (言葉) は各資料で使用数が多いものの、いずれの資料でも“~”が付される。また、“*iamābuxi*” (山伏) のように、いくつかの資料で少数のみ使用される語であっても、それらの内で共通して“~”が使用されているものもある。

なお、「さんげ」「文典」では、収録語彙の異なり数が辞書類より少ないため、“~”使用の異なり例も他の資料より少ない。例えば、辞書類に共通してあらわれる“*ābura*” (油) は、「さんげ」「文典」にはあらわれない。このような各資料間の収録語彙の相違には注意が必要であろうが、“~”が使用される語彙は概ね共通しているといつてよい。

しかし、各資料で共通してあらわれる語であっても、“~”の有無が相違する場合がある。例えば、「西日」のみに“~”が付されるものの内に、*xōbāi* (商売)・*xōbat* (賞罰)・*fōbō* (方々) などがある。これらはいずれも b の前の母音に長音のアセント符号が付されているが、「正・補」では“~”のない形であらわれる。このような例については資料の書記方針の差から説明できる。つまり、自筆本である「西日」では“~”を子音字に付すため、長音に濁音が続く場合でも、長音符合と“~”が共存できる。しかし版本では、いずれの符号も母音字の上に付されるため、使用環境が衝突する。コリヤードはこのような場合、長音符合を優先する<sup>(6)</sup>。つまり、

このような書記方針の相違によって、「西日」で“～”が付されるものであっても、版本では付すことができない。これらの語は、版本で“～”が付されていないとしても、潜在的には“～”を付す語であった可能性が高い。

このほか、上記以外の相違例で用例数の多くないものについては、“～”がオプショナルな性格であることから、偶然性によるところが大きく、判断が難しい。fobaxira（帆柱）は「続」と「西日」で1例ずつあられ、 “～”が付されるが、「正・補」には“～”の付されない1例のみがあり、“～”の有無が共通しない。このような例の多くは用例数が少ないことから、偶々付されなかったと考えるべきか（fobaxira「帆柱」についていえば、「正・補」に「-柱」を後部要素に持ち、かつ“～”の付される ximōbaxira（霜柱）が確認されることから支持されよう）。

また、voioibu「及ぶ」のように全体の使用数が多い一方で、“～”使用例がごく少数のものは、誤りである可能性が高い（voioibu「及ぶ」は「続」・「西日」で“～”無が各13例・11例なのに対して、“～”有はそれぞれ1例ずつ）。

以上から、やや疑問も残るが、本稿では資料間の相違例をこのように処理し<sup>(7)</sup>、対象資料の間で b 前に“～”を付す語は、やはり概ね共通しているものと判断する。つまり、コリヤードはバ行の濁音前鼻音の有無について、基本的に一貫した見解を持っていたと考えられる。

### 3.3 ③④について

ここでは論述の便宜上③と④をあわせて扱う。コリヤードが“～”を付している語について整理すると、b のうちで、母音 a が後続し ba の綴りを持つものが多い傾向がある（③）。これは、【一覧】で、いずれかの資料で“～”の付される異なり91例のうち、約半数の43例が“ba”の綴りを持つことから窺えよう。

また、【一覧】からは、濁音化<sup>(8)</sup>によって生じた b が多い傾向が見出せる（④）。各資料で多く使用されている cotoba（言葉）は連濁形と見なしうるし、先に見た -baiai（-早い）なども同様である。また、助辞-ba（ば）や voba（をば）などは、【文典】や『大文典』で、助辞 va が濁音化したものと捉えていることが分かる<sup>(9)</sup>。【一覧】の内で筆者が濁音化と判断したものは47例ほど<sup>(10)</sup>で、半数を超える。

もっとも、合成語における“～”使用が構成素を単位としている（3.1）ことから、コリヤードの使用意識に沿うのであれば、構成素単位で観察する必要がある。【一覧】の用例から各構成素を抽出し、それらを異なり単位で整理し<sup>(11)</sup>、濁音化／非濁音化及び ba／非 ba を基準にした分類を数で示すと、次の表②の通り（表中では濁音化を「濁化」、非濁音化例を「非濁化」とし、b に a 以外の母音が接続する

場合は「非 ba」としている。なお、「濁音化」について厳密に判断するのは困難であるが、ここではひとまず全体の傾向をつかむことを目的とし、便宜的な判断に基づいた数値を示す。また、語義未詳であるなど問題のある語は除外した)。

表②	濁化	非濁化	全体
ba	16	14	30
非 ba	14	29	43
全体	30	43	73

“～”が付されうる語の内、[ba : 非 ba] で [30 : 43]、[濁化 : 非濁化] でも [30 : 43] であるから、やはり③④の傾向が窺えるように見える。次には、この分布と“～”との相関性を確認する目的から、“～”の有／無ごとの分布整理を、各資料(比較的用例数の多い「正・補」「続」「西日」に限る)において行い、“～”が付されない場合との比較を行う(表②-1、2、3)。

「正・補」表②-1

～有	濁化	非濁化	合計
ba	12	3	15
非 ba	8	19	27
合計	20	22	42

～無	濁化	非濁化	合計
ba	12	34	46
非 ba	13	118	131
合計	25	152	177

「続」表②-2

～有	濁化	非濁化	合計
ba	7	3	10
非 ba	5	9	14
合計	12	12	24

～無	濁化	非濁化	合計
ba	7	22	29
非 ba	7	79	86
合計	14	101	115

「西日」表②-3

～有	濁化	非濁化	合計
ba	11	8	19
非 ba	6	18	24
合計	17	26	43

～無	濁化	非濁化	合計
ba	13	43	56
非 ba	16	137	153
合計	29	180	209

いずれの資料でも、“～”が付される場合の ba 及び濁音化の用例数が“～”が付されない場合よりも高い比率にある。例えば「正・補」では、“～”の付される [ba : 非 ba] で [15 : 27]、[濁化 : 非濁化] で [20 : 22] であるのに対し、付されない場合は前者で [46 : 131]、後者で [25 : 152] である。この点から、ba の綴りをも

つ語と濁音化とみなせる語に“～”が付されやすい傾向が指摘できよう。

もともと、ba の綴りをもつ場合や濁音化の場合であっても“～”が付されない例は一定数存在しており、これらの要因が“～”使用の絶対的な基準ではないことが分かる。これは、濁音化例を次のようにコリヤードが濁音化と判断していた可能性の高いもの<sup>(12)</sup>に限っても同様である。

#### “～”有

-baco (箱)、-baiai (早)、-bara (原)、-baxira (柱)、-boxi (星)、-ba (助辞は)、-botoqe (仏)、-buqi (葺)、-bachi (蜂)

#### “～”無

-bito (人)、-bucuro (袋)

#### 存疑

-bi (日：fibi (日々)、maiebi (前日)は“～”無し。iuai (祝日)のみ“～”有が「西日」に1例確認できるが、「正・補」「続」「さんげ」では“～”無し)

-bune (舟：caribune (借舟)、chözzubune (手水舟)、faxibune (端舟)は“～”無し。派生的な vmabune (馬槽)のみ“～”が「続」に1例確認できるが、「正・補」「西日」では“～”無し)

これらの濁音化例に限ると、ほとんどの例に“～”が付されている一方で、-bito (人) や -bucuro (袋) には一貫して付されていない。そのため、コリヤードは濁音化と判断したものに、確かに“～”を付しやすい傾向はあるものの、全てに付すわけではないということが確認される。

なお、ここで“～”有りの例に ba の綴りを持つものが集中し、“～”無しの例は ba の綴りを持たない点も注意されよう。つまり、ba になる濁音化例に“～”を付している可能性が想定される。しかし、この点について立証可能な程の用例数や確例が得られず、判断できない<sup>(13)</sup> <sup>(14)</sup>。

以上から本稿で指摘できるのは、コリヤードは b の前に“～”を付すにあたり、濁音化した語や ba の綴りを持つ語を選びやすい傾向があるが、例外も存在するということになる。

### 3.4 結果

以上、コリヤードは b の前の“～”使用を語ごとに設定していること ①、その語は自筆本も含めた自らの著作の中で概ね共通していること ②、そのうちには“ba”の音節を持つ語 ③ と「濁音化」した語が多い傾向にあること ④ を確認した。③と④の関係性については、判断保留とし、可能性を指摘するに留めた。

以上、コリヤードの著作にみられる b 前における“～”の使用傾向を指摘した。これらはコリヤードの濁音前鼻音についての見解として重要といえようが、その独自性の有無に疑問が残る。すなわち、コリヤードの著作に確認された b 前の“～”使用が独自の観察に基づくものか、他の日本語観察などから影響を受けたものかは、確認する必要がある。以下では、この点について検討しておく。

#### 4. コリヤードの“～”使用は『大文典』の影響か

コリヤードが影響を受けうる「他の日本語観察」には、ロドリゲスの『大文典』が想定される。コリヤードが「文典」を著すにあたり、『大文典』を参照していたことは、「文典」序文やその内部徴証からも明らかである<sup>(15)</sup>。また、2節で確認した「さんげ」での“～”の使用傾向（d, g に多く、z はほぼ使用されず、b は限定的）は、(1)の『大文典』の記述と類似する。そのため、濁音前鼻音の理解についても『大文典』の影響は想定しうる。次には『大文典』のバ行の濁音前鼻音に関する記述を再掲する。

- (1) この法則は、ある場合に B の前の母音 A を支配することがある。それは Mairi sorofaba（参りそろはば）のように、主として F が重複して、その F が B になる場合であるが、一般的なものではない。

ここでは、バ行の濁音前鼻音の例に「参りそろはば」をあげる。これはコリヤードの著作で“～”の付される助辞 -ba と一致すると共に、ba の綴りに“～”が付されやすいこととも関わりうる。さらに濁音前鼻音があらわれる場合の記述に「F が B になる」“se muda o, F, em, B”とある。『大文典』の記述は、さらに複雑な法則を意図したものと思われるが、「濁音化」の記述は『大文典』に存在している。これらの点について、『大文典』とコリヤードの著作の間には類似点が見出せる。

しかし、コリヤードの“～”使用が『大文典』の記述から直接影響を受けたものであれば、表②（1、2、3 も含む）における「ba」や「濁化」の項目“～”の使用率はより高いものが期待される。また、「B 前の母音 A」という点には対応性が見出されず、直接的な因果関係が認められるほどの一致はみられない。そのため、コリヤードの b の前での“～”利用と『大文典』の記述には、確かに類似点を見出せるものの、直接的な影響を受けたとまではいえない。コリヤードの濁音前鼻音についての見解は、少なくともバ行については、独自のものと考えるのが自然だろう。

#### 5. まとめと今後の課題

本稿では、コリヤードの表記した“～”の実態から、コリヤードの当時の濁音前鼻

音に対する見解を窺うことを目的とし、bの前における“～”について考察を行った。本稿の内容をまとめると次の通り。

- ・ bの前に“～”を付す語は特定の語に限られ、対象資料の間ではほぼ共通している。これは、コリヤードが“～”を付すべき語を意識していたためである。
- ・ “～”が付される語には“ba”の綴りをもつものと、コリヤードが濁音化と認定したものに多い
- ・ bの前に“～”を付す基準はコリヤード独自のものとみなしてよい

bの前における“～”の使用基準が、コリヤード独自のものである点について、本稿ではコリヤードの日本語の濁音前鼻音に対する見解を反映すると捉えるが、これが中世末日本語の音韻・音声実態そのものとは考えない。例えば、濁音化についてはコリヤードの認定が関わるため、人為的な規範意識を想定するべきであろう。また、baに“～”が付されやすい点についても、コリヤードの母語や言語学習歴といった言語的背景が影響しうる。

同様のことは、従来利用されてきた『大文典』についても想定しうる。両者には類似点・相違点が確認されたが、検証すべき点は多い。今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 岩澤克 (2013) 「コリヤード『懺悔録』の表記の特質—イエズス会資料との差異—」『上智大学国文学論集』46
- 小鹿原敏夫 (2015) 『ロドリゲス『日本大文典』の研究』和泉書院
- 大塚光信 (1966) 「解題」『コリヤード羅西日辞典』臨川書店
- 大塚光信 (1979) 「解題」『羅西日辞書』勉誠社
- 川口敦子 (2012) 「コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同 ローマ、ヴァチカンにおける調査を中心に」『人文論叢』29
- 川口敦子 (2013) 「コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同 (2) 国内諸本など」『三重大学日本語学』24
- 川口敦子 (2014) 「コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同 (3) 「マドリー本」をめぐって」『三重大学日本語学』25
- 川口敦子 (2015) 「コリヤード『羅西日辞書』諸本の異同 (4) 活版印刷の技術的背景から」『三重大学日本語学』26
- 成晴慶 (1995) 「コリヤード著『羅西日対訳辞書』のティルデ表記について」『東北大学言語学論集』4
- 土井忠生 (1938) 「コリヤード日本文典の成立」『日本諸学振興委員会研究報告』第三篇 (国語国文学)
- 山田昇平 (2012) 「D. コリヤード著『さんげろく』の“～”」『語文』99
- 山田昇平 (2014) 「ロドリゲス『日本大文典』における“sonsonete”—濁音前鼻音記述をめぐって—」『四天王寺大学紀要』58

#### 参考・引用テキスト

日本大文典：『日本文典』（勉誠社 1976）、土井忠生訳『ロドリゲス 日本大文典』（三省堂 1955）

さんげろく：『コリヤードさんげろく私注』（臨川書店 1985）

日本文典：『コリヤード日本文典』（風間書房 1957）

羅西日辞書：『コリヤード羅西日辞典』（臨川書店 1966）、『羅西日辞書』（勉誠社 1979）、筑波大学付属図書館ベッソン・コレクション（請求記号198.221-B39）の web 公開画像 <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tree/besson.php>

西日辞書：『コリヤード自筆西日辞書複製・翻刻・索引及び解説』（臨川書店 1985）

日葡辞書：『日葡辞書』（勉誠社 1973）、『邦訳日葡辞書』（岩波書店 1980）

羅葡日対訳辞書：『羅葡日対訳辞書』（勉誠社 1979）

#### 使用データベース

LGRM：丸山徹校訂ポルトガル語正書法書類：<http://joao-roiz.jp/LGRM/>

#### 注

- (1) 「アクセント符号」とするののが一般的であるが、同種の符号の差す事象が日本語学の用語である「アクセント」と対応するものではないため、ここではポルトガル語やスペイン語の *acent* を借りて弁別する。
- (2) 成嗜慶 (1995)、山田昇平 (2012)、岩澤克 (2013) など
- (3) 『羅西日辞書』の諸本については大塚光信 (1979) や川口敦子 (2012, 2013, 2014, 2015) で指摘されるが、ここでは臨川書店による影印本（従来「マドリ一本」とされ川口 (2014) でスペイン国立図書館 SG (b) 本と特定されたもの）を主とし、不鮮明箇所などを勉誠社による影印本（亀井本）、筑波大学本で補った。
- (4) 成嗜慶 (1995) など
- (5) 大塚光信 (1966) で、正編・補遺と続編とは成立時期や成立過程が異なるとされるため、ここでは両者を分ける。
- (6) 山田 (2012)
- (7) 「正・補」と自筆本である「西日」の相違については、資料間の問題も関わりうる。即ち、「正・補」のスペイン語・日本語の多くは「西日」からの引き写しであることが指摘されており、“～”についても基本的に当てはまるのが自然である。一方で、先にみた *fobaxira* (帆柱) のように両者に共通してあらわれる語彙で“～”の有無が相違する場合、両者の関係からすると、積極的な修正が行われたと見ることもできよう。しかし、“～”使用全体からみると、このような例は少数に留まるため、現段階で改変の有無については保留とする。
- (8) ここで「濁音化」とするのは、いわゆる「連濁」に限らず、注 (9) のようにコリヤードが *ba* → *va* と解釈する *va* の例など、より広く捉えたほうが有効と考えることによる。
- (9) 例えば、助辞 *ba* は「文典」で、「助辞 *va* (は) は総ての活用の否定語根の後におかれる。(…中略…) 助辞 *ba* (ば) も同じ意味をあらわし、これも *va* (は) と同じ

く語根に結びつけられる。」(大塚高信訳 p. 49) とされる。これは、その直前の助辞 va の説明を受けてのことであるから、助辞 ba は va と同じ意味としていることが分かる。また、ロドリゲス『大文典』では、ba を va の「同一語でにがり」(Nigori) となつてゐる」(土井訳 p. 535) としており、助辞 ba を助辞 va が濁音化した同語と捉えていたことがわかる。コリヤードが同様の理解を示している訳ではないが、「文典」で二つの助辞を同じ意味としていることから、『大文典』と同じ理解に基づいても不自然ではない。

このほか、voba については、「文典」に以下のようにある。

助辞 vōba (をば) は、vova の二番目の v が b に変わったものと同じで、va (は) と同様に用いられる。例. fune vōba nōri sutète ; cane bacāri tōri marāxità (船をば乗り捨てて；金ばかり取りました。) (大塚高信訳 p. 8, 下線は筆者) voba の ba を va から変じたものとしており、濁音化形として捉えていることがわかる。

- (10) 同時代的な語源意識などから、確実に濁音化と判断しがたいものもあることから、この数値は判定基準によってやや前後すると思われる。
- (11) 調査範囲における用例の認定方針を以下にまとめる。
- ・同定作業の上で未詳とした例は除外した。
  - ・b の前が n, m である例や、版本において母音に既に“^” “~” “” が付されているなど、印刷上の都合で“~”の使用が見込めない例は除外した。
  - ・他の要素と合成していても構成素が共通していれば、1 例として抽出した。  
「気早い qībaiai」「起こし早い uocoxī baiiai」「足早な axībaiana」→「-早」(～有)で抽出  
「皮袋 cauabucuro」「金袋 canebucuro」→「-袋」(～無)で抽出
  - ・ただし、同じ構成素からなるものであっても、同一資料内で“~”の有無が相違する場合は、別に抽出した。  
「松原 matcūbara」, 「野原 nobara」→それぞれ～有, ～無 1 例ずつとして扱う
  - ・漢語形態素については語構成を同様に捉え難いため、語単位を 1 例としたが、助数詞などはこれを 1 例として抽出した。  
「時分 jibun」「知分 chibun」→2 例として扱う  
「一番 ichiban」「二番 niban」→「-番」で抽出し、1 例として扱う
- (12) 次の 2 点のどちらかを満たすものを、コリヤードが濁音化を意識していた可能性が高い例と判断した。
- ・「文典」に言及があるもの
  - ・著作全体の中で 2 例以上の異なる前部要素に接続している後部要素で、かつ原形の使用例が確認されるもの。
- 例えば、助辞“-ba”や“qibotoqe” (木仏) は「文典」で濁音化したものとして扱われている。また用例 (3) a で示したように、「早い」は“qi baiiai”のような複数の前部要素との接続例があり、かつ非濁音形の“faiai” (早) が「正・続」などに確認されるため、濁音化例として判断できる。なお、“~”有は、異なる前部要素で 2 語以上“~”が付されているもの、“~”無は同一形態素とみなせるもので、一定して付されていないものをあげる。判断の難しいものを「存疑」とした。
- (13) ここでは、判断保留の態度をとるが、ba となる濁音化例には“~”を付すという可

能性を否定しない。“～”使用にみられる、後続母音の種類と濁音化の有無といった傾向は、それぞれ言語的レベルを異にする。これらを、それぞれ独立した使用要因とみなした場合、具体的なコリヤードの使用意識が想定し難い。そのため、これらの傾向に関係性を認め、ひとつの方針と考えるほうが、少なくとも蓋然性の高い判断であろう。この点については、稿を改めて検討を行いたい。

- (14) また、bに後続する母音が影響するという点から、前接する母音の影響も想定されるが、これについては際立った分布を見出せない。
- (15) 土井忠生（1938）、小鹿原敏夫（2015）など

#### 附記

本稿は、筆者が2014年度に大阪大学に提出した博士論文（『中近世日本語の濁音・鼻音をめぐる研究』）の一部に大きな修正を加え、更に第337回日本近代語研究会秋季大会（於東北文教大学）で口頭発表を行った内容を、発表時の質疑などに基づき改めたものである。会場で賜った有益なご意見に記して感謝申し上げます。

（やまだ・しょうへい 本学招へい研究員）

## 【一覽】

原文表記	翻字	「正・補」		「続」		「西日」		「さんげ」		「文典」	
		有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
cotoba	言葉	6	0	7	1	9	0	9	0	4	0
tobi, u	飛ぶ	5	0	28	2	5	0	0	0	0	0
vobi	帯	5	0	4	1	5	0	0	0	0	0
abura	油	4	3	6	1	7	0	0	0	0	0
ba	ば（助辞）	4	2	1	1	6	1	41	4	6	1
michibiqi, u	導く	2	0	2	0	3	1	0	0	0	0
michibicare, uru	導かるる	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0
auabi	鮑	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0
toboxi, u	点す	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0
farabi	腹帯	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0
cuhibiru	唇	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0
coboxi, u	零す	1	0	4	0	2	0	1	2	0	0
cobore, uru	零るる	1	0	1	0	1	0	0	6	0	0
cobaco	小箱	1	0	5	0	0	1	0	0	0	0
tebaco	手箱	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
faiabaiato	早々と	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0
axibaia	足早（い、に、な）	1	0	2	1	0	1	0	0	0	0
vocoxi baiai	起こし早い	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
qibaiai	気早い	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
iamabuxi	山伏	1	0	1	0	1	0	1	1	0	0
sōbet	惣別	1	1	0	5	1	0	2	3	0	2
qibotoqe	木仏	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0
iatçubara	奴原	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0
matçubara	松原	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
nobara	野原	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0
ximo baxira	霜柱	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
fobaxira	帆柱	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0
xicacu baxira	四角柱	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
cobocaxij	こぼかしい	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
cavara buqi	瓦葺	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
noxi buqi	伸葺	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
qibaraxi	気晴らし	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0
cumabachi	熊蜂	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0

aribachi	蟻蜂	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
cobocu	古木	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
tatebaqi	立て掃き	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0
tobi	鳶	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
nodobuchi	喉ぶち	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
fataboxi	旗星	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
foqiboxi	箒星	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
acatçuqiboxi	暁星	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
cacubet	格別	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
ibiqi	軒	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0
ierabare, uru	選ばるる	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
ierabi, uru	(選ぶ)	0	0	0	6	0	4	0	0	0	0
gaibun	外聞	1	1	0	0	0	2	0	1	0	0
cavabata	川端	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0
famabata	浜端	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
faxibaxi	端々	1	0	0	2	0	1	0	0	0	0
xebone	背骨	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
fiqibari	引梁	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
firo birotu	広々と	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
fibicaxe, u	響かす	1	1	0	1	0	2	0	0	0	1
fibiqi, u	(響く)	0	1	0	6	0	1	0	0	0	0
fôbai	朋輩	1	0	0	5	0	1	0	0	0	0
focorobacaxi, u	綻ばかし	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
focorobi, uru	(綻ぶる)	0	2	0	0	0	1	0	0	0	1
yûbe	夕べ	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0
aqebono	曙	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
sôbai	相倍	0	0	2	1	3	0	0	0	0	0
cobuxi	拳	0	1	2	1	1	0	0	0	0	0
iamabato	山鳩	0	1	2	0	1	0	0	0	0	0
vieqi bataqe	植木畑	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
vomobacari, u	慮る	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
fuxibuxi	節々	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
voioibi, u	及ぶ	0	14	1	13	1	11	0	0	0	3
axibo	あしぼ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
vmabune	馬槽	0	1	1	1	0	1	0	0	0	0
qibucasa	気深さ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0

fibana	火花	0	2	0	1	3	0	0	0	0	0
xōbai	商売	0	2	0	1	2	0	0	0	0	0
fōbi	褒美	0	3	0	3	1	2	0	2	0	0
fōbō	方々	0	2	0	0	1	2	0	0	0	0
xōbat	賞罰	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
cōbaxij	香ばしい	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0
aburi, u	炙り	0	3	0	4	1	1	0	0	0	0
ivaibi	祝い日	0	2	0	1	1	2	0	1	0	0
curo ibo	黒疣	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
saiban	裁判	0	2	0	7	1	3	0	2	0	1
xibaqi	柴木	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
tada baxiri ni faxiru	只走りに走る	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
faxi bami	榛	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
fibari	雲雀	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
fibō	紐	0	2	0	0	1	1	0	0	0	0
voba	をば（助辞）	0	0	0	0	0	0	31	4	3	0
reba	れば（助辞）	0	0	0	0	0	0	8	13	3	3
nareba	なれば（助辞）	0	0	0	0	0	0	7	1	0	5
nhōbō	女房	0	3	0	5	0	5	1	12	0	0
corobi, u	転ぶ	0	4	0	3	0	5	1	2	0	3
zuba	ずば（助辞）	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0
fitobito	人々	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1
zuibun	随分	0	1	0	0	0	1	0	4	1	0
yorocobi, u	喜ぶ	0	7	0	9	0	4	0	4	1	2
yorocobaxe, uru	喜ばする	0	1	1	3	0	1	0	0	0	0
				有	無	有	無	有	無	有	無
				[正・補]	[続]	[西日]	[さんげ]	[文典]			
凡例											
・各資料で1例でも“～”が付された語を一覧し、各資料での“～”使用例数と非使用例数を示した。											
・（ ）で囲われたものは“～”が付された例はないが、直上の語と関係する語であり、参照として示している。											
・翻字にあたって、各翻刻・索引及び『日葡辞書』『羅葡日対訳辞書』のほか、「羅西日」などは対訳ラテン語・スペイン語を参照した。翻字は『邦訳日葡辞書』及び『コリャード自筆西日辞書』の索引を参照にしつつ、筆者の解釈で行った。											